

お稲荷さまと共に

宮崎駿監督の映画『となりのトトロ』のなかで、雨の雫の音と共にお稲荷さまが神秘的に描かれています。ウチのお寺で生まれ育った父や



叔父叔母も私も不思議なお稲荷さまと共に育ちました。

ウチのお寺のお稲荷さまは、「泉養稲荷(せんよういなり)」というお名前で、戦国時代に広島で戦火にあい、焼け出され美濃の地までいらっしゃいました。当寺の大空和尚の時代、村娘の「おふじさん」にのりうつり、「このお寺の近くに祀って欲しい」とお告げをされました。それが始まりで当寺の鎮守社としてお守りいただいています。最初は、大空さんの「大」と娘ふじさんの「藤」を取り「大藤稲荷(だいとういなり)」と言うお名前でした。私が住職になる1年前に境内の枯れた井戸が蘇った縁で、その就任時に「泉養稲荷」とお名前を代えさせていただきました。「なんと罰当たりな！」と思われるかも知れません。その代わりに、平成14年から26年まで毎朝井戸の水で水行をしました。神佛との対話では、このように「交換条件」を示されることが多いのです。現在ではこのお水を汲み、檀家さんの月参りの際にお供えをし、亡き方々がたいへん喜んでおられるのを感じます。

…小さな声でお話しますが、佛と違ってお稲荷さまなど萬の神はわがままでお世話が難しいです。たぶん、神主さんは僧侶より大変な職業かも知れません。



私は幼少の頃、扁桃腺が弱くよく熱を出し近所の行きつけの医者へ連れていかれました。たまにですが、「今日は喉が腫れていないのに熱が出てい

ますね…」とお医者さんが言われます。すると父は近所の子供がいる家を訪ね、同じように熱をだして寝込んでいる子を探します。すると必ずいるのです。父はその子供に、「お稲荷さんの近くで何か悪さをしなかったかい？」と問いただすと、「お稲荷さんの横で立ち小便をした」といいます。父はすぐにお寺へ帰り、その場所に塩をまき般若心経をよみ謝ってくれました。

お稲荷さんは、汚い、騒がしいことがお嫌いです。また、お社の周りが明る過ぎるのもお嫌いで、庭師さんが入られる際は気を使います。

明治22年に国鉄東海道本線が岐阜まで開通し、お寺の前で木曾川の鉄橋工事が行われました。毎日、工夫さんが橋から木曾川へ落ちる事故が続き、それが何日もですから気持ちが悪くなり、現場の親方が当時の住職(私の曾祖父)に相談に来ました。幸い川の水の中に落ちる人ばかりで大けがをした人はなかったそうです。

原因は工事の騒音をお稲荷さまが嫌われたからです。曾祖父がお稲荷さまに謝り無事開通しました。その時、曾祖父はお稲荷さまからどんな「交換条件」を示されたのかはわかりません。でも命がけのものだったように思います。その話が地域に広まり、通称「鉄道稲荷」呼ばれるようになりました。

俊徳丸